



「砂に棒で字を書くようになって、 学校は続けます」

1月末、ガザからアトファルナろう学校のジェリー・シャワ校長が来日しました。ジェリーさんは、昨年6月に来日予定でしたが、ガザの状況がどんどん悪化して、延期になっていました。1月になって突如、イスラエルからガザ出国の許可が下り、その翌日あたかもガザを脱出するかのように出国しました。ジェリーさんの来日は5年ぶりです。

ちょうど日本についた頃、ガザの封鎖は極限状態になり、エジプト国境の壁が壊されてたくさんの人が物資を求めてエジプト側にあふれ出るという事態にもなりました。ジェリーさんは緊迫したガザの様子と、そのなかでも奮闘しているアトファルナろう学校の最近の様子を報告してくれました。日本滞在中は、東京、大阪、仙台で講演したほか、日本の聴覚障がい若者、仙台の高校生などとも交流し、またガザの現状について新聞やテレビ、外務省の方にもお話をしました。

アトファルナろう学校 ジェリー・シャワ校長 来日報告会

強制収容所から

檻の中に閉じこめられているというのがガザの市民が置かれている状況です。私たちは屋根のない収容所、いわば監獄の中に閉じこめられています。世界で一番大きな強制収容所に150万人が閉じ込められている。その半分75万人は14歳以下の子どもたちです。子どもたちは政治や軍事とは関係がないにもかかわらず、ガザに生まれただけでひどい目に遭わされている。これが集団懲罰です。

日本のように自由な場所に住んでいる皆さんには、この状況を想像するのは難しいかもしれません。私たちは四方を完全に囲まれていて、ガザから出るにはイスラエルの許可がいります。その許可を得ることはほとんど不可能です。同時に、外の世界の人々がガザに入ることも大変難しい。またガザの中から物を輸出することも、ガザへ物を輸入することもできません。今はインターネットがあり、Eメールで連絡を取り合うことができますが、いつ途切

れるかと常に怯えています。もっとも半分止められているようなものです。ガザでは一日2時間しか電気がありませんから、それ以外の時間はパソコンも使えないのです。

アメリカやイスラエルのメディアは、ガザについて「過激で恐ろしい場所」というふうに誇張した報道をしています。私はアメリカ生まれですが、ガザの社会の一員として、周りのパレスチナの人たちと普通に生活をしてきて何も問題はありませんでした。いまはこの30数年のなかで最悪の状況だと思います。

人為的な危機

2007年の6月、ハマスがガザを完全に支配するようになってから、封鎖は非常に厳しくなっています。イスラエルと国際社会はハマスを引きずり下ろそうと封鎖を強めたわけですが、同時にイスラエル軍が今もなおガザに軍事的に侵攻してきています。家が壊され人命が失われています。ミサイル攻撃

も依然として続き、日に数度あることもあります。家でくつろいでいたり、学校の教室にいたり、突然大きな衝撃音、爆発音がする。近いとガラスが降ってくるし、たとえ遠く離れたところにおいても非常に恐怖を感じます。

経済制裁の結果、ガザに入ってくるのは、基本的に三つのものだけです。その第一は、基本的な食料。なにが基本的かは、イスラエルの解釈によるので、実際に基本的なものといえるかどうか。イスラエルはたとえば、子どものお菓子、赤ちゃんのおむつ、石けんや洗剤、マッチや電池などを基本的な必需品と考えていません。それから限られた医薬品。最後は燃料ですが、すでにだいぶ前から燃料は非常に制限されているうえに、イスラエルは燃料の供給を制裁の手段としていて、自分たちに気にくわないことがあると、どんどん減らして、今回（1月末から2月）のように完全に止めるのです。その結果、ガザのほとんどの地域が24時間以上停電し、水道も止まり下水が溢れています。

物が無い

アトファルナはろう学校なので、生徒は補聴器をつけていますが、この補聴器の電池を入手することができません。学校では紙が底をついています。プリントを配れないので、黒板に字を書いてテストをしています。プリンターのインクもないし、ノリもありません。図工の材料はだいぶ前になくなって、鉛筆やノートもなくなりそうです。

聴覚障がいの子もたちは「見る」ことも奪われています。2時間しか電気がありませんから、家の中は真っ暗です。宿題をすることもできません。聞こえないし、見えないという二重のハンディを負わされているのです。

皆さんには今起きていることをどんな形でもいいから感じ取って欲しい、理解して欲しいと思っています。例えば、東京が封鎖され、しかも非常に高度な軍事技術によって占領されているというような状況を想像してください。

飛行場は爆破されていて使えません。物も入ってこない。限られた食料品と限られた薬品、しかも薬品は入ってきても、注射器などは入ってこない。わずかな燃料しか入ってこない。最初はそれほど感じないかもしれませんが、一ヶ月、二ヶ月経つと封鎖されていることがどんどん骨身にしみてきます。水道水が安全でないのがガザでは蛇口の水を飲んではいけません。ミネラルウォーターもフィルターも手に入れることができません。

皆さんはチョコレートを食べないかもしれませんが。しかし現実にチョコレートがないとなると別の話です。子どもたちが欲しがっても入手できないととても無力さを感じます。車も故障したら「修理する部品がありません」と言われます。銀行のATMを使って現金を引き出すと、利用明細書が出てきますね。その用紙さえガザにはないんです。ですから残高があるのかさえ分かりません。独立して新しく仕事を始めようと、一生懸命貯めたお金で店

を借りて、機械や設備を入れて、開店と思ったら紙がない、インクがない、電気がないから、事業そのものを中止せざるを得ない、これがガザです。

電気がないと

子どもが良い成績で高校を卒業して、奨学金をもらって大学に進学しようとしても、ガザを出ることができないから入学できない。娘が結婚することになったが、別の都市に住んでいて結婚式に出ようと許可を申請しても、「ダメ」と言われればそれで終わり。年をとったお母さんが死にかけていてひと目会いたくても、お母さんがヨルダン川西岸にいたら会いに行くことができない。ガンや心臓病、脳腫瘍の治療さえ受けられないから、多くの人が亡くなっている…。日常生活の大変さについては、しゃべりだすと止まらなくなります。

医療機関の状況は、皆さんも想像がつくと思います。ごく限られた医薬品しかなくて、設備が壊れても修理することもできない。注射器などの消耗品は底をついている。麻酔薬がない時がしばしばあります。もしそんなときに誰かが緊急の手術を必要になったら…。

電気についていえば、電気製品とか照明とかだけに留まらない影響が起っています。上下水道も全て電気によってコントロールされていますから、ガザではその両方が動かないために、たくさんの家庭で、床上に下水が流れ込んでいます。

問題はこうした状態は天災でないこと、人為的に意図的に作られたものなのです。しかしこうした封鎖を続けても、イスラエルや米国が目指しているように、ハマスが力をなくすとは思えません。むしろ、かえって力が強まるばかりでしょう。ガザに住んでいれば誰だって、経済制裁をしているのがイスラエルだということを知っています。それに、追い詰められているのはハマスではなく一般の人たちです。



子どもたちが安心できる場所

アトファルナろう学校は、昨年開校から15年を迎え、生徒が300人になりました。

1992年に、パレスチナ子どものキャンペーンと一緒に始めた頃の生徒の数は27人でした。日本の皆さんの支援、それから私たちガザのスタッフの努力、共にこの15年間にやってきたことを大変誇りに思っています。アトファルナは、ガザの小さい民家を借りて始めました。それが今は、文字通り年間数千家族に対してサービスを提供できるようになっています。子どもたち、聴覚障がいの人たち、それからその家族にとって安全で、居心地の良い場所になっていると自負しています。

厳しい状況の中にいるガザの子どもたちに、どのような希望を与えることができるのかとよく聞かれます。みなさんのご支援、皆さんの意志が、子どもたちが教育を通じてよりよい未来を作ることを可能にした、と思います。アトファルナでは、子どもたちに自立して強い人間になっていくことを教えたいと思っています。ご存じのようにガザの状況は大変に厳しく、しかも、彼らは聞こえないというさらに厳しい状況にいるからです。しかしアトファルナは、こういう状況の中でも過去3年間にたった6日間しか学校を休校することがなかったと、誇りを持って報告します。学校がずっと継続され、安定していることは、子どもたちに安心感を与えます。特に聴覚障がいの子もたちにとって、アトファルナは、手話で仲間とコミュニケーションすることができる非常に居心地の良い安心できる場所だからです。



成長したアトファルナ

スタッフの多くは、自身が聴覚障がいの人たちです。その割合は職員全体の40パーセントを超えました。アトファルナで学んだ生徒、卒業した生徒たちもその中に含まれています。幼稚園には3歳から5歳までの50人の子どもたちがいて、先生たちはほとんど全員がろう者です。夢のように楽しいおもちゃがあります。その多くが日本から送られたものです。

アトファルナは中学3年レベルまでできました。将来的には正式な高校のカリキュラムを導入したいと考えています。すでに生徒の二人は高校の勉強をして、高校卒業の資格試験に受かっています。昨年中学を卒業した8人には、先生の助手としての訓練をしています。聞こえる先生のもとでいろんなことを学んでいます。同時に高校の勉強をしています。アトファルナでは普通の学校と同じように、子どもたちは算数、国語、地理、英語などを学んでいます。一番得意なのは英語と算数です。

カリキュラム

アトファルナろう学校は、当初、口話教育、つまり発音を読み取っていく、聞こえない子どもたちもなるべく声を出すとこの形で始まりましたが、その後手話を中心にした教育に切り替えました。今はバイリンガルといって、二つの言語、口話と手話両方を同じようなレベルで進めていくという教育をしています。

パレスチナ自治政府の作ったカリキュラムを元にしてはいますが、聴覚障がいのためのカリキュラムは存在しな

いので、先生たちが工夫をして、それを蓄積してアトファルナ独自のカリキュラムを作ってきたといえるでしょう。

アラビア語はたいへん難しい言語です。書き言葉と話し言葉が別なのです。それに比べると英語の方がずっと易しいといえます。ちなみにアトファルナで使われているのは、アラビア語をもとにしたアラビア語手話のパレスチナ方言、そのまたガザ方言のようなもので、基本的にはアラビア語の手話です。

アトファルナは公立の学校ではありませんが、授業料、通学バス、教材、制服、靴、下着にいたるまで、学校が生徒に無料で提供しています。300人の子ども全員に100パーセントです。運営していくのは非常に大変です。

地域へ広がる活動

「パレスチナ子どものキャンペーン」を通して、皆さんがアトファルナを支援してくださっていることの意味がどれだけ大きいかとおわかりいただけるかと思います。もし、こうしたものが提供できなければ、親たちは負担できませんから、子どもたちは学校に来ることができなくなります。アトファルナは給食もしています。現在、ガザの子どもたちはちゃんとしたご飯を食べていないわけです。子どもたちは朝一番に「今日の給食はなに？」と聞きます。私が子どもの頃には、学校の食事は美味しくないと感じていましたが、アトファルナの子どもたちにとっては、一番大事な食事です。

アトファルナの活動は、学校から始まって地域に広がっています。まず聴覚部門。聴覚検査や補聴器外来があり、またスピーチセラピーをしていて、地域のたくさんの人が来てサービスを受けています。2007年の一年間で、外来のほか、いろんな地域や幼稚園などでのスクリーニングも含めると

約7000人の人たちの聴覚検査を行うことができました。特に、貧困地域やへき地などに力を入れています。しかし大きな矛盾を抱えています。検査をして「聞こえない」ということが分かって、補聴器を提供したいと思っても補聴器がないという状況に今直面しているからです。

職を作り出す

クラフトも製作販売しています。職業訓練と収入源という二面から始めました。作っているのは聴覚障がいの男性、女性ですが、教えている人たちのほとんども聴覚障がいです。アトファルナの中で作業をしている人以外にも、270人ぐらいの大変貧しい家庭の女性たちが内職の形でこれに参加しています。これは彼女たちにとっては非常に重要な家計を支える元になっています。月に2500円ぐらいかもしれないかもしれませんが、それによってパンが買えるとか薬が買えるのです。もしかしたら、これしか収入がない家族もいるかもしれません。たくさんの人たちの生活がかかっているクラフトですが、実はいま大きな問題があります。封鎖、経済制裁によって、原料が入ってこなくなっているのです。また、作った製品をガザから外へ出して、日本などへ送ることも大変難しくなっています。一生懸命皆が作って、ビジネスとして育ててきたのに、今後どうなるのかという危機感を抱いています。

そのほか、アトファルナでは聞こえる人たちに手話を教えたり、学校に通えなかった大人の聴覚障がい者のための識字クラスも開いています。また、聴覚障がいを早期発見して、なるべく小さいときから支援をしていくというプログラムも進めています。こんなふうにアトファルナは毎日たくさんの人たちが出入りし、にぎわう場所になっています。

イスラエルとアメリカと

イスラエルを憎んでいるか？とよく聞かれますが、別に憎んではいません。というのはイスラエルにも素晴らしい人たちがいるからです。しかしガザの状況に対して、イスラエル社会の一般市民から声が上がっていないことは、私にとって驚きです。ユダヤ人たちがかつてひどい目に遭ってきたということをももちろん私はよく知っていますし、パレスチナ人の多くも知っています。そして、そのことを否定してはいけなと思っています。だからといって、今他の人たちを苦しめていいということではないと思うわけです。また、そういう苦難の歴史を背負っている人たちが、罪のない人たちに対して被害のおよぶことを黙って見ているということは大変に悲しいことです。というのも、現在ガザの中にイスラエル兵はいませんが、ガザは軍事占領されたままです。イスラエルが制空権を確保し、ガザの上空を含めて全てを取り囲んでいて、時々軍事侵攻をするわけです。

私はパレスチナ問題の解決は交渉による話し合いしかないと考えています。しかし同時にイスラエルが話し合う相手は、パレスチナ側の穏健派でなく強硬派の人たちよりほかなと思っています。

ブッシュ米大統領は、パレスチナ問題を解決するためにがんばると言っていますが、私から見ると遅きに失しているのではないかと感じます。アメリカは自由な国だと言われていますが、報道はそれほど自由ではないという気もします。アメリカの人はガザで起きていることを何も知らないのではないかと。アメリカでは、世界で本当に起きていることを知るために多大な努力を払わなければならないのです。

経験のない心理状態

ガザでは5歳の子どもが政治のことをしゃべっていてもなんら不思議では

ありません。電気があるときはみんなテレビの前に釘付けになってニュース番組を見ているんです。

しかし私たちの社会は大変に孤立し、外部と切り離されているの

で、中で起きていることが生活のすべてです。つまり、死と破壊です。親戚の誰か、兄弟、従兄弟が死んだとかいう話ばかりなんです。したがって子どもたちが実際に知っていることは死や破壊だけ。子どもたちの心理状況は大変厳しく、アトファルナではカウンセリング活動をたくさんしています。

一週間でもいまのガザで生活するだけで、皆さんは強いストレスを感じるでしょう。それにガザは、1967年から軍事占領下にあるという事実を忘れてはいけません。つまり自由がない状態が40年以上続いているのです。当然ながら、ガザに住んでいる人たちはいろんな問題を抱えています。例えばPTSD、ストレスを受けた結果によるトラウマがあります。ガザの場合は大きな事件が日常的に続いていて、一度も終わったことがないわけです。しかし心理学的にはこれほど長期で大規模なトラウマを表現する言葉はありません。ガザの人たちが抱えている問題は表現さえされないのです。ガザの住民はほとんど全員がうつ状態にあるといって間違いないんです。しかし誰もその話をしません。なぜか？自分だけでなく、相手も同じだからです。だからお互いにそんなことを言い合っても仕方がないのです。

あなたに出来ること

まずは皆さんが子どもたちに関心を持ってくれる、心配をしてくれるということが一番大きなことだと思います。ガザは孤立しているからです。

また敢えて率直に言えば、いまは経済的な支えというのを私たちは必要と



しています。というのも、イスラエルが「敵対地域」という宣言をして以降、ガザには国際的な支援がほとんど途絶えているからです。西側諸国のNGOも政府も個人もガザに支援をしたら、ハマスの関係者、何か危険人物みたいと言われるのがイヤだと思うらしく、ガザには経済支援がまったくないわけです。

しかし、ガザのNGOに支援をしないということは、ガザで起きている絶望的な状況をもっと追いやることになると思います。ガザの場合は大家族ですから、100人のスタッフがいるアトファルナのようなNGOですと、スタッフの10倍から12倍の人がその給料に頼って生きているわけです。ですから、財政的に困ってスタッフを解雇しなくてはいけない、閉鎖しなくてはいけないとなると、1000人以上が生活に困るわけです。そうすると多くの人がどんどん追い詰められていって、軍事行動などに追い込まれていく人が出てくる状況になるわけです。一般的に経済支援は必要といえますが、今は、特に死活問題だといえます。アトファルナのクラフトを買っていただくことも、多くの人たちの生活を支えることにつながっています。

しかし、紙も黒板もなくなって、砂に棒切れで字を書くようになって、アトファルナを続けていこうと、私たちは考えています。

(ジェリー校長の招聘には、国際交流基金の助成を受けました。ここに感謝します。)